２０２４　オホーツク地区サッカー協会技術委員会　テクニカルスタディ

第１０３回全国高校サッカー選手権大会オホーツク地区予選大会

２０２４年８月３１日
会　場【えんがる球技場】
報告者【オホーツク地区サッカー協会 ＴＳＧグループ】

１．大会の概要

この大会は、高校生年代で最後のカップ戦であり、選手や指導者において集大成となる大会である。全道・全国へと続く大会でもあり、選手は、高いモチベーションでのぞんでいる。試合時間は８０分（４０分ハーフ）で行われている。

今回は、決勝（**北見北斗高校―遠軽高校**）を分析させていただいた。当日は、大雨が降る中での試合となり、良い環境下とはならなかったが、両チームの選手やスタッフの気持ちの高まりは十分にアップの様子からうかがえた。決勝の１試合だけではあるが、両チームが取り組んできたことの成果を知り、課題を分析する中で、今後の各カテゴリーチームにおける方向性を探る参考資料として活用して頂ければ幸いである。

２．両チームへのインタビュー

〈北見北斗高校　武田　航　氏〉

高校総体後は、パスゲームを中心にポゼッションの力を高めてきた。

今日は、ビルドアップから中盤でのポゼッションでボールを失わず、相手の隙を狙って崩し、得点を奪いたい。

雨がすごく、あまり良くない環境ではあるが、パスをしっかりとつなぎたい。今までやってきたことに結果がついてきてくれると信じている。

〈遠軽高校　太田　武　氏〉

総体後からは、シュートの決定力を高めることを中心に取り組んできた。相手陣での崩しから、良いシュート体勢にもっていくこと、また、体勢が崩れても精度のあるフィニッシュとなるようにフィジカルも鍛えてきた。

今日は、できるだけ相手陣でプレーするため、前線からの守備を徹底し、ボールを奪いきることと崩しからのフィニッシュを正確にして得点を重ねていきたい。

３．ゲーム分析

『北見北斗高校 － 遠軽高校』　スコア１－５（前半０-３ 後半１-２）

（１）試合データ

北見北斗のシステムは１-３-４-２-１、遠軽は１-４-１-４-１でキックオフ。

ボールポゼッションの回数（パスが４本以上連続した回数）は、下記の表の通りとなっている。北見北斗は、GK を含め後方から中盤へパスをつなぐ場面が多く見られた。対する遠軽は、相手の背後や楔を狙ったロングボールと後方からのビルドアップを状況に応じて選択していた。ポゼッションにおいては、北見北斗の成功回数が上回っているが、アタッキングサードでの効果的なパスが少なかったのが残念なところである。対する遠軽は、４本以上の連続パスは少ないものの、高い位置の FW へ正確なロングフィードを入れ基点を作ってから決定的な場面を多く作り出していた。

ポゼッション（回）	前半		後半		合計
	0-20分	20-40分	0-20分	20-40分	
北見北斗	2	１１	9	5	２７
遠軽	1	3	0	2	6

シュートは、前後半を通じて遠軽の方が多く見られた。前線の守備から相手陣でボールを奪ってからのシュート場面やボールを丁寧につないでフィニッシュにつなげる場面、セットプレーからの場面など、ゴールに迫るシーンが多く見られた。スリッピーなグランドを利用し、意図的にバウンドシュートをする選手もいた。高校総体後からチームの課題としてきたシュート精度についても枠内を捉えることが多く、５得点につながっていた。

シュート（枠内）	前半		後半		合計
	0-20分	20-40分	0-20分	20-40分	
北見北斗	2（0）	2（0）	1（1）	2（1）	7 （2）
遠軽	3（3）	5（5）	6（3）	4（3）	18 (14)

一方、北見北斗は、相手の粘り強い守備にシュートチャンスをなかなか作り出せずにいたが、後半ゴールに迫る場面が見られた。特に FW⑨の裏への飛び出しは迫力が感じられた。

（２）成果

「攻撃への関わり」

遠軽高校は、FW⑨が相手 DF ラインの背後や楔の動きをタイミング良く狙い、自身で突破したり、サポートへ入った味方へ正確につないだりしてゴールへ迫っていた。また、味方ボールホルダーが、前を向いた時には、他の選手がどんどん湧き出し、４人５人と厚みのある攻撃を展開していた。中盤での縦パスをインターセプトし、飛び出してくる味方につなぎながら５点めを奪った場面は、チームの狙いが顕著に表れていた。北見北斗は後半、中盤の選手がバランスを考えたポジショニングと少ないタッチ数でサイドチェンジなどのパスが出始めた。無理な突破を図らず、タイミングよく関わったサイドの選手（特に左サイド⑪）へのパスが見られた。

「ボールを奪う意識」

遠軽高校は前線からの守備を選手全員で意思統一し、規制→制限→限定という守備組織を構築していた。相手陣でボールを奪うことが多く、決定的なゴールチャンスを作り出していた。間延びをしないように DF ラインからのコーチングも最後までピッチに響いていた。

「ポゼッションスキル」

北斗高校は、ＧＫを含めたビルドアップから中盤へボールを運ぶ際に２タッチ以内で前進することが多くあった。大雨でスリッピーなグラウンドでもつなげる技術をうかがうことができた。

（３）課題

「味方の駆け引きを最後まで観る」

「プレッシャー下でのパス&コントロールの質」

これまでも課題となっているが、オホーツクの各カテゴリーチームが全道大会で勝ち抜くためには、パスとコントロールの精度をさらに上げる必要がある。決勝のゲームでもアタッキングサードでのミスパスやコントロールのミスがなければ、得点に繋がったのでは、という場面が散見された。チームとして意図的に攻撃を仕掛けるためには、「相手を基準としてオフの準備の質を高める」「ボールホルダーが受け手の意図を最後までよく観る」「止まってボールを受けずに動きながらのプレーの質を高めること」がとても重要になると感じた。

「組織としての守備」

両チームとも、全体をコンパクトにしながらボールを奪おうとしており、そのようなチームはとても増えてきた。ただ、コンパクトにしたことにより、最終ラインの裏やサイドの空いたスペースを与えてしまい、ケアできていないことも見られた。ボールを奪うために相手にスペースを与えないことも重要であり、そのためのポジショニングや最終ラインのコントロール、GK が果たす役割も大きい。相手のボール状況による攻撃の予測や相手選手の状況などにより、最終ラインのコントロールをはじめとする守備の連携の精度が求められると感じた。

４．ＧＫのプレー

（１）守備のプレー

シュートストップに関しては、両チームとも常に良い準備を心がけており、シュートに対する姿勢や構えるタイミング、ポジションが安定していた。ブレイクアウェイに関しては、裏に抜け出したり、ゴール前にスルーパスが通ったりした場面が数回見られたが、DF ラインの位置を把握してタイミングよく対処し、失点を防いでいた。

（２）攻撃参加

ＧＫも関わり、ビルドアップしようという場面は、北見北斗に多く見られた。この日は、雨や風が強くミスをしてしまう恐れもあったため、前線へのパントキックを選ぶことが多かったが、攻撃のスタートとして、味方に確実につなごうとする意識はうかがえた。相手が前線からプレスをかけてくる状況では、つなぐのか、リスクを回避するのかという判断がしっかりとなされていた。これまでの選手権では少なかったアームスローによるクイックでのつなぎが多くなってきたのは成果である。全道大会に進む遠軽高校は、強豪相手にリスクは高くなるが、ぜひチャレンジしてほしいところである。

５．最後に

技術委員会では、２～４種の大会・リーグ戦においてゲーム分析を行っている。冒頭でも述べたように、現状の成果と課題を捉え、オホーツク地区のこれからの指導や次のカテゴリーでの指導に活かしていただければ、という願いがあっての取り組みである。今回のゲーム分析の内容は、該当するチームだけではなく、他チームにもあてはまる現象があるかもしれないので、各チームで参考資料として活かしていただければ幸いである。

最後に、このＴＳＧレポート作成にあたり多大なご協力を頂きました２種委員会の大会及びチーム関係者の方々に深く感謝申し上げます。

【文責】本大会ＴＳＧ担当：オホーツク地区サッカー協会技術委員　岡村　英治・松村　圭悟